違和感含んだ夢をみよう

玖月あじさい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

違和感含んだ夢をみよう

【Nコード】

N1458V

【作者名】

玖月あじさい

【あらすじ】

登場人数不明。ジャンル不明。短編集。けれど続く。話数はきつちり、三十

世界の螺子を巻くのが僕であれ君であれ、きっと世界は変わらず動く。

(前書き)

これは pixiv にて借りさせていただいている「なんて気持ち悪い30のお題」(URL <http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=124443>) に則った短編集です。

世界の螺子を巻くのが僕であれ君であれ、きっと世界は変わらず動く。

「死ね」

そう言つて眉間に銃を突きつけられた。

「じゃあ君も死んで」

私は彼の口の中に錠剤を押しこんだ。

ぐだりと草の上に寝転がって溜め息をつく。私と彼と、二人並んで空を見る。

足の方から水の音。そりゃそうだ、なんつたつてここは川辺なわけだし。川辺で彼と二人、制服姿で。平日の昼間からこんなのだから、人にジロジロ見られてあー、うつとおしい。

何でこんな時間に学生が？ つてまず目を惹かれて、次に男子と女子だから何、カップル？ つて変な目で見られて、それからああ、今平日の昼間だしサボってるのね、なんて呆れられて、最後に彼の横の銃と私の横の薬瓶にギョツと目を丸くして、でその人の視界から私たちは消える。

「何やってんだろうね、私達。あんなバカみたいな演技やって」

「だろうね、大根役者にもほどがある」

「本当、私達つて演技が下手。だからうまくいかないだろうね」

「全部が全部。気持ち悪いよな、俺達は」

びよびよと能天気にはヨドリが鳴いている。

「ところで、さっきの薬、何？」

彼が聞いてくる。私は傍らに転がしてあつた薬瓶を手渡す。

「ああ、胃腸薬……。あれ、胃腸薬つて多めに取つて平気だっけ」

私達の常備薬。今日も私は朝食後に飲みました。

「分からない。でも風邪薬よりかはマシなんじゃない？」

「そんなもん？」

「そんなもん」

私達はまた無言になる。空は青く澄み切って……なんかいない。

どんよりと曇り空。ああ、気分が重くなる。まるで今の私のようだ。

「ねえ、ごめんね。こんなことに付き合わせちゃって」

「いや、俺の方こそ、だよ。ありがとう」

こんなこと。もちろん、学校からのエスケープだ。私は隣の彼とは仲が悪い、ってことになっている。今日も二人で盛大に喧嘩して、そのまま学校の外まで走ってきた。馬鹿みたい、私と彼は協力体制にあるって言うのに。そういう意味では私達は決して大根役者と言うわけではないかもしれない。

「ああ、もう、面倒だよな」

「そうだな、全部」

「なにもかも」

「面倒くさい」

「消えてしまってもいいかな」

「死んでしまってもいいかな」

そう言っ、私は胃腸薬の瓶を手に取り眺め、彼はモデルガンで安全装置を外す動作をする。そしてまた、私は薬を一錠、彼の唇に押し当て、彼もまた私の額に銃口を突き付ける。

周りの人の動きが止まる。今、この河原にいる人たちはみんながみんな私達を注目している。おじさんもおばさんも何も知らない人たちは、一体私達がどうするつもりなのかと、どう行動すべきかを分からずにただ立ち尽くして、こっちを見ている。犬でさえ吠えようとしない。

「まるで私達を中心に世界が回っているみたいだね」

「今、俺達がこうやって拮抗しているから世界は止まっている？」

「そう。世界を動かしているのは私達」

「俺が死んだら、世界は止まる？」

「私が死んでも、世界が止まる」

全てが真っ暗になって何も感じなくなっ、そのまま世界は凍って止まる。けれど、私達って誰だろう？ 私達の範囲はどこまで？

だからこそ、世界は永遠に動いてしまうのだ。
誰がどうあがこうと、世界と言つ舞台は永遠に動き続ける。

世界の螺子を巻くのが僕であれ君であれ、きっと世界は変わらず動く。

(後書き

どうも、玖月あじさいです。

短編集。それも初めてのお題をお借りしての挑戦です。

初めてで30題ってどうよ。って少しだけ思った。後悔も少しだけしてる

「なんて気持ち悪い30のお題」

全てできたらいいなー。と。

それではー

花に埋もれても無機質は変わらない

無機質の定義とは。

無機物を作る元素。

ただこれだけだ。

じゃあ無機物ってなんだ、ってなると今度は鉱物とかミネラルとかになるわけで。

それなら無機質人間って言うことがあるけれど、それは鉱物の一部である人間ってことになるんだよな。ならあいつは何の鉱物の一部なんだろう。

というわけで、遠山夢樹。俺のクラスメイトである。

中肉中背の無機質人間で、なんだろう、際立ってこういう奴だ！と胸を張って言えねえ奴。

……と周りのクラスメイト曰く。しかし俺自身はそれは少し違うんじゃないかな、と思っている。遠山はなんとなく無機質人間って感じがする。

休み時間には宿題に励み、昼休みは仲のいい奴らで固まって弁当食べて、放課後は部活に励む。ゲラゲラ笑ったり、しょぼくれたり、照れたりもしている。これだけ言うと、普通に楽しげな男子高校生で、別に無機質人間じゃないように思えるかもしれない。

でも、あいつは。

例えば。

何か友達と話していて、笑っていた時。あいつだっただけで笑う。けらけらげらげらあははみたいなさ。けれどある時突然笑みは消えるんだ。

ふ。

そんなときの遠山の顔はすごく真面目、というか何も感じていないような目で。声をかけるのもためらわれる感じがする。

無機質、というか、鉱物、って言うのが合っているように思う。とは言え、一瞬後にはもう普通に周りのやつらに合わせて目を和らげているのだが。

あの瞬間を、見るのは変な感じがする。

ちょっと覗き見してるような。人の裏側垣間見ちゃってますし。今現在も、見えちゃってますよ、裏側。

放課後の時間で、教室には俺と遠山だけ。俺は家よりも集中できるから、と勉強をしていて、一方遠山はぼんやりと机に寝そべってまっすぐ前を見ている。そんな遠山の目が、鉱物になっていた。

鉱物、無機質。

鉱物とか言うのと、宝石とかもカテゴライズされるけど個人的にはそんな綺麗なのじゃないような気がする。なんか、濁った奴。不格好なやつ。キラキラ美しいものなんて、あいつには合わない。

じわりと汗ばむ。ああ、不愉快だ。まだ梅雨は明けそうにない。遠くの木にやたらとでかい花が咲いている。あれ、何て言うんだろ。うな。本当に大きな花卉。ぼとりと茂みに落ちた白い花卉がさ、緑の中ですげえ浮いてる。近くの赤桃色のツツジよりも目立ってるんだ。

いつのまにか、椅子が大きく音を立てて倒れていた。遠山が俺の方を不審げに見たようだけど、鞆も椅子もそのままに俺は教室から出ていく。

土ふまずと、靴下の空間が妙に生温かくて、んで、それにも負けず劣らずの皮膚にまとわりつく空気ぬるさ。指と指がべたついてイライラする。靴履き替えるのも面倒だから、そのまま外へ。あ、ヤベー、スリッパの溝の間に土とかはいりこむ、まあいいか。

ペソペソと音を立てて教室に帰ると、相も変わらず遠山は机の上に伏せていた。目は閉じられていて、あ、鉱物見えねえや。そういえば、俺が倒したままの椅子は元に戻されていて、あー、直してく

れたんだ。

俺は無遠慮にスリッパを高く鳴らしながら遠山の机の横に立つと、抱えていた白色の花と赤桃色の花とを遠山のちょうど上からはらはらとはらはらとはらはらとかけてやった。

「……………何だよこれ」

細く眼を開けた遠山が不機嫌そうな声で抗議してくる。

「花」

「分かってるよ、それぐらい」

遠山はぶつぶつと、机と椅子とか直してやったのになんでこんなことやらねなきやいけねんだよ、とか、花とか何だよただのごみじゃねえか、とか文句言っている。だから。

「遠山つてさ、一瞬鉋物になる時あるから」

「好物？」

「寶石とか、鉄とかの鉋物な」

「どういふこと？」

「笑った後とか、ふっ、って無表情になるから。鉋物チツクなのが
お前なのかなって、思って」

「だからって何で花をぶっかける方向に行くんだ？」

「花に埋もれたら、なんか変わるかなって」

俺は床に散らばったり、遠山の上に器用にとどまっていたりして
いる花を両の手に集めた。開いた窓の前に立つ。

両手を広げる。

落ちる、花。

白と。

赤桃色。

花に埋もれても無機質は変わらない（後書き）

どうも玖月あじさいです。

pixivより、なんて気持ち悪い30のお題をお借りして書かせていただきました。

第二話。

鉛筆の芯とダイヤモンドって同じ炭素のはずなのにどうしてこうも違うのか、そういうお話です。

嘘です。

それではー

「こんなだったら、好きになんかならなきゃ良かったのにな。」

失恋した。

「私、遠山君のことが好きです」

「……嬉しいけど、ごめん」

たった二行の告白劇。その結果は玉砕で。

「失恋した」

「うん、二度目」

私の幼馴染は、私が奢ってやったイチゴオレをストローでずーずーやりながら頷いていた。その紙パックを暴発させてやるうか。

「遠山は鉱物だから」

「コウブツ？」

「鉄鉱石とか、そういう系の鉱物。好きなもんじゃないよ？」

わけわかんないんですけどー、って文句言ったら、あいつの目は時々鉱物なんだよ。って返された。ますますわけわかんないよー、って私は要らないプリントをぐしゃっと丸めてゴミ箱目かけて放り投げる。プリントはゴミ箱の淵に当たって、外へと弾かれた。

「でも知らなかった、お前、遠山のこと好きだったんだ」

「……悪い？」

にらみつけると、輪島は、いや別に？ とちよつと嘲笑う感じで答えてきた。

「恋愛けっこうじゃないか。高校生たるもの、恋愛の一つも立派な人生のスパイスになるもんだぜ？」

「誰が言ってたの？」

「どっかの漫画家がインタビューで」

へー、なんて聞こえるか聞こえないかぐらいの声で生返事をしつ

つ、二つ目のプリント丸めたのをゴミ箱へ放り投げる。あ、すつこい外れていった。

自分でもどうでもいいような恋愛話。正直なんでこんなつまらない話、って思うけれど、どうして輪島は聞くんだろうね、それも嬉しそうに。幼馴染ってだけじゃ、こんな嬉しそうに聞かないでしょ。

「……もしかしてさ、輪島って人の不幸は蜜の味ってタイプ？」

「は？ 何でだよ、俺ってば人類みんなの平和を願うようなタイプだぜ？」

「……嘘くさい」

私は帰ってから飲もうと思っていたフルーツオレにストローを突き刺した。横から輪島が、ずりー、そっちの方が良かった、なんて言ってるけれど気にするものか。お前は人の不幸でも吸って生きてる。

「そういえば、お前は遠山のどこがよかったわけ？」

「う、わー……」

「聞いてちゃいます？ そんなこと。私、失恋したばかりだよ？」

「そんな傷心ガールに聞いてちゃうの？ 女心ってのをもっと分かれよー。」

ぶにー、と輪島の頬を思い切り引つ張る。いひゃいひゃい、とちゃんと発音できずに笑う輪島に私は余計にムカついて。輪島のイチゴオレをかつさらって、一気にズゴーツと吸い尽くす。

「あ、おい！ 俺のだぞ？！」

「黙れ！ 元々私のお金だ！」

「そうかもしれないけど！ でもお前のグチ聞く報酬じゃん！」

「グチを聞いてもらうことよりも、私のイライラが勝ったのさ！」

フルーツオレに伸ばしてくる輪島の魔の手から逃れるように上体を反らす。椅子の前足は宙ぶらりん。ついでに私の足も空中に。そしてそのまま重力に沿って背中から

「っつ！ いった！」

「あああああぶなかつたああああつー！！」

床に激突する前に私の右手首は輪島に掴まれていた。男子高校生の力が半端なく使われて皮膚がひきつってたたたたたたたた！

「ちよ、痛い痛い痛い痛い！ 大丈夫、もう大丈夫！ 私もう大丈夫……、つてフルーツオレエエエエエエエエツッ！！」

私の愛しいフルーツオレは教室の床に無残に零れてしまっていた。慌てて力を弱めたけれど、半分ぐらいにまで減ってしまった。ティッシュ、ティッシュ！ と鞆を漁っていると後ろで輪島は淡々とティッシュでフルーツオレを吸い取っていた。

「あーあ、勿体ねえ」

「うっさいなあ……」

「いつそトイレトパーパー貰ってこいよ、あれで吸いとりゃなんとかなるだろ」

そっか、と納得した私はダッシュで女子トイレに入ると一個のトイレトパーパーをつかんで教室に戻ると、フルーツオレを吸い取った。全然使わないうちに吸いとれたけれど、黒いごみ袋は臭いことになってしまった。

「……捨てに行かなきゃ」

「っーかもう帰ろうぜ……」

そうだね、と何だか削がれちゃった私達は机を元通りに直して教室を後にする。

ごみ置き場に小さなゴミ袋を放り投げる。パサ、ともドサ、ともつかない音がして、綺麗にごみ山の頂点に収まる。あ、なんかこれ嬉しい。

「なあ」

輪島が後ろから声をかけてくる。けれど私は振り返らない、スカートのポケットから自転車の鍵を探すことに忙しいから。

「お前さ、選ぶんならもつと楽なやつ選べよ、俺とかさー」

「うぬぼれんな」

サククリと輪島の冗談を切り捨てる。後ろからチエツ、という声

が小さく聞こえる。あ、鍵あつた。

「帰りますかー」

「帰りますかー」

シャツ、とペダルを一回空回りさせてからこぎ出す。坂道をけっこうな勢いで下る、下る。先に下ってるのが私で、後ろからブレーキかけながら下ってるのが輪島。ここから先はほとんど会話もなく最終的にそれぞれの家の近くの分かれ道でさようなら。これの予定だったんだけど。

「

」

「え？ 輪島あーっ！ 何か言ったーあ？」

「……っ！ 何もねーよっ！」

ちよつとだけいつもと違っていた。何て言っていたのが、結局分からずじまいだった。

ね。　　こんなだったら、好きになんかならなきゃ良かったのに

こんなんだったら、好きになんかならなきゃ良かったのにな。(後書き)

どうも、玖月あじさいです。

今回もお題をお借りして書いております。

この話でストックが切れました。どうしましょう。

とりあえず、次を書いていますのでお待ちいただければ幸いです。

それではー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1458v/>

違和感含んだ夢をみよう

2011年9月24日03時29分発行